

蜘蛛の糸

『蜘蛛の糸』は小学校の国語の教科書で初めて読んだ思い出がある。悪いことばかりして地獄に落ちた罪人でも、その生涯で一度でも良いことをしていたら、お釈迦様が地獄から天国に行ける蜘蛛の糸を垂らして下さると思った。しかし、自分だけ助かればいい、そのためには他人はどうなってもいいと考えると、その瞬間に蜘蛛の糸は切れるのだと思った。

小さな蜘蛛にも命があり、人の命も蜘蛛の命も同じであり、生き物の命を大切にすることが大事なのだったと思ったが、すぐに忘れて蟬取りや魚釣りを楽しんでいた。それを悪いことをしていると全く思わなかった。蟬取りをされていて蜘蛛の巣が顔に巻き付き、邪魔だったので巣を破った時に蜘蛛が逃げ出していくのを見て、殺そうとはしなかったことを思い出した。

この年になって『蜘蛛の糸』を読み直すと、いろいろ思うところがある。カンダタは殺人や放火などいろいろな悪事を重ね、地獄に落ちて蠢いていることは当然だが、一匹の蜘蛛を踏み殺さなかったことで、仏様から地獄から天国に抜け出すチャンスを貰ったのだ。この程度を善行といえれば誰でも一度は行っている。だから仏様は地獄のすべての罪人も天国に上げられるチャンスを与えようとしたのではないだろうか。握ることで仏様につながる蜘蛛の糸。しかし、人の生存欲は何よりも強く、自分さえ助かればと思うのも自然である。カンダタも自分だけ助かればよいと思い「俺だけの糸だ」と喚いたのも当然のことだと思える。他人を押しつけて自分だけ助かろうという人間の性



に仏様は悲しそうな御顔をされたが、すぐぶらぶらと歩き始められた。やはり仏様から見ると浅ましく思えたのだろう。

人がそれぞれの正義に従い努力をして、何とか生きていくことは正しいことではあるが、可能な限り他人にも別の正義があることも思わなくてはならない。

芥川龍之介は自身の死を常に意識していたのではなからうか？創作という魂の競演の中でのみ死を忘れられたのではなからうか？その結果、創り出された名作は時を超え魂を震わせる。名作は現代の問題にも過去の歴史にも通じていて、単なる感動だけでなく、重いものを読者に突きつける。

『蜘蛛の糸』の短い文章は、人がどう生きるかを考えさせる深い内容があり、いつまでも読者の心の中に棲み続けていく。

河童忌や 心の中に住む他人

県下唯一の医書出版協会特約店

医学書専門 井上書店
看護学書

〒755-8566 宇部市南小串2丁目3-1(山口大学医学部横)

TEL 0836 (34) 3424 FAX 0836 (34) 3090

【ホームページアドレス】<http://www.mm-inoue.co.jp/mb>

新刊の試覧・山銀の自動振替をご利用下さい。